

飛耳長目

通巻165号 平成29年8月1日発行

「修身教授録」探求（第二百二十九回） 再掲のことば

森信三全集第九巻261頁の凡例に、

「この教授録は、森信三先生が、大阪附天王寺師範学校及び同女子師範学校において、実地に教授せられた「修身料」の講話を、生徒たちの筆録した十冊の記録の中から、男子三冊女子二冊をえらんで刊行するものである。本巻に収められた講話は、主として昭和十一年四月より翌三月にかけて、満一ヶ年間に、大阪附女子師範学校の本科第一部の三年生に対して行なわれたものである。」

編集の都合上、多少順序を変更すると共に、また若干の加除があるとはいえ、ほとんど全学年の講話を彷彿せしめるものといつてよい。」とある。

言うまでもなく将来新しいのちを妊み育む女性は、生まれながらに天の容易ならぬ使命を賜^{たまわ}っていると考ええる。そこでいかなれば、女子教育の如何^{いかん}が将来の日本民族の雌雄を決す、と言えまいか。その女子教育の基礎基本的修養の具体策を講じた文書は、有史以来その存在は稀有^{けう}である。したがって、ここに改めて森信三先生の警咳^{けいがい}を偲ぶこととする。

（二繁）

一 新学年のあいさつ

森信三

国山もはてしとぞ思ふ入海の
向うに低き段々島

これは皆さんもご承知かと思いますが、島木赤彦の歌集「太虚集^{たいきよしゅう}」の冒頭にある歌です。これは赤彦が歌の友人の斎藤茂吉が、長崎で病氣していたので、遥^{はる}ばると長崎まで見舞に行った時の歌ですが、そうした感慨がよく現われているでしょう。わたくしは大学を出た頃から歌を始めましたが、じつはこの一首の感動によって導かれたといつてもよいほどです。

■はじめに

今年のご縁があつて、あなた方の組の「修身」の授業を受け持つことになりました。そこでまず最初に、少しく考えるところがありますので、わたくしのお話しすることば、すべて控えを取つておいて頂きたいと思ひます。これはなかなか骨の折れることではありますが、しかしやっつけなければ、次第にその意味も分つて来ようかと思ひます。それゆゑ最初から

どういう考えでかような事をして頂くか
 ということば、只今は申すことを差し控
 えたいと思います。これはひとりあなた
 方にとって相当な重荷であるばかりでな
 く、わたくし自身にとっても、一々お話
 しすることを書き残されるということは、
 容易ではないところがある訳です。しか
 し人間の本当の真剣さというものは、こ
 ういうところに初めて生まれるものでは
 ないかと思うのです。即ちわたくしたち
 は、自分の口から出る一切のコトバが、
 実はみなさん方の手許に書き残されると
 いうことが分って、初めて本当の生活が
 始まるともいえましよう。

■「修身科」とは

さて筆記のことはそれだけとして、わ
 たくしがあなた方の組を受け持つのは、
 今年が始めてでありますから、まず最初
 に修身科というものは、一体どうあるべ
 きかということについて、多少わたくし
 の考えをお話し申しておきましょう。修
 身科はすでにその名も示すように、わが
 身を修める学問であります。ですからわ
 たくしたちは、この自分というものを修
 めるところまで行かなければ、真に修身

科を学ぶものとは言えないわけでありま
 す。即ち人間はかくかくすべきものだと
 いうようなことを、ただ口先で言ってみ
 たり、あるいは単に心の中で思うだけで
 は、真に修身を学んだとは言えないでし
 ょう。ですから真に修身を学ぶというこ
 とには、そこに大なる決心が必要であつ
 て、つまり、自分の根本的な改造に着手
 する覚悟がなくてはなりません。即ち何
 よりもまずこの自分というものを、根本
 から鍛え直すという大決心が必要であり、
 そしてこのことを常に心の底に置いて、
 日々実行に力めるといふ考えにならなけ
 れば、真の修身科を学ぶ態度とは言えな
 いでしょう。

ところが、これまで修身科に対するあ
 なた方の態度や考え方は、一体どんなも
 のだったのでしょうか。人々の多くは、
 修身科というものは、ただ教室で教科書
 の内容について、先生が説明されるのを
 聞いているだけで、事が済むかのように
 考えていた人が、多かつたのではないで
 しょうか。従って時間の終わりの鐘が鳴
 れば、もはやそれで修身科の時間は終わ
 ったかのように考えていた人が、多かつ
 たのではないのでしょうか。ところがかよ

うな考えでは、何年いや幾十年修身の話
 を聞いたとて、ほとんど何の役にも立な
 いでしょう。真の修身は、実は授業の終
 わりの鐘が鳴ったところから始まるので
 す。即ち今こそ、その一時間の間に聞い
 た事柄を実行に移す時が来たわけです。
 現に終わりの鐘が鳴ってから、教室を出
 るまでのわずかの間にも、各人の考え方
 や態度は、千差万別に現われるとも言え
 ましよう。試みにクラスの人々の、教室
 の出方を見ていてごらん下さい。先生の
 姿がドアの外へ消えるや否や、直ぐにあ
 くびをする人、のびをする人、話を始め
 る人、また同じくあくびをするにも「あ
 ーあ」と声を出してする人、声は出さな
 いが手放しで大口開いてする人、手で口
 をおおうて、心持ち内向き加減にする人
 々、このようにあくび一つをとってみて
 も、人間の段階は千差万別でしょう。で
 すからあなたがたは、ただ先生方によく
 思われて、点数さえ貰えばそれでよいと
 いうような、そういうさもない根性では、
 どうてい真の人間にはなれないでしょう。
 このように、終わりの鐘が鳴ってから、
 廊下へ出るまでの様子を見ただけでも、
 自分の兄嫁として来て貰ったらと思える

人と、そうでない人とは、あなた方の眼にもハッキリと分ることでしょう。さらに一步廊下に踏み出したら、どのよう廊下を歩むか、また階段の上り下りをどのようにするか、その一步一步が真の修身です。またご不浄へ行くその出入りの一々、また道を歩くにどのようにするか、電車に乗ったらどのように腰をかけるか、また立っている場合にはどのような態度で立つか、それらの一々がすべてこれ修身であり、人格修養の道場といつてよい訳です。道場は必ずしも禅寺の坐禅堂とか、何々修養道場などというものばかりとは限りません。今申したように電車やバスの昇り降りから、道の往復そのものまでが、わたくしどもにとっては、すべてが生きた修養の道場です。そこであなた方は、禅宗の修業憎が坐禅堂で坐禅をしているような気持ちで、電車に乗るがよいでしょう。

飛耳長目 (ひじちょうもく) ■「家庭」こそ真の道場

とところがわたくしたちにとって、さらに大事な修養の道場は、実は家庭であります。この点については、いづれ次第にお話し申しますが、人間が出来ているか

否かは、主としてその人の家での暮し方の如何に基づくと言つてもよいでしょう。そしてこのことは、ことにあなた方婦人の場合において特にそうだと思います。実さい家庭というものは、われわれ人間にとつては最大の道場であり、あなた方のような女性にとつては、唯一無二の人生道場と言つてよいでしょう。

以上申したように、真の修身というのは、けつして修身の時間の中だけに留まるものではないわけで、むしろ一日二十四時間のうち、修身科以外のすべての時間こそ、かえつて真の修身の時間だともいえましよう。上に申した事柄の一々については、いづれ次第に申してまいります。とにかく最初にまず修身科の本質を明らかにするために、真の修身科とは如何なるものかということ、ハッキリさせておきたいのです。即ち真の修身科とは、この現実のわが身自身を修める学問であり、徹頭徹尾実行の学問であると申してよいでしょう。随つて其の修身は、教室だけで終わるものでは断じてなく、むしろ教室を出てからこそ、真の本舞台にかかると言つてよいでしょう。で

すからこうして教室でお話しているのは、いわば本舞台に出る前の楽屋の衣裳づけにも等しいわけでありませう。ですからあなた方も、最初に先ずこれだけの事を、十分にお腹にいれておいて頂きたいのです。即ちこれまでのように、修身科とは退屈な時間ではあるが、しかしマア黙つて聞いていればそれで済む、というような生ぬるい考えを一擲(いってき)して、これを絶好の機会とし、自己の根本的な改造を決意し、この一年間で全く生まれかわつた人間にならう、というような一大決心をもつて臨んで頂きたいのです。これ今年あなた方の修身を受持つご縁の出来たわたくしが、学年始めに当りあなた方に対する唯一の希望であり、かつお願いでもあります。では……。 (猪岡静枝記)

(修身教授録第四卷昭和15年5月発行同志同行社)

自分自身を観る (微言)

森信三

○人間はときどき、骨身に徹して自己の愚かさきを味うことが必要である。といふのはそれによつて、自己の浄化ができるからである。まさに自己の大掃除である。

○ある意味では、人間の考えることは大体似ていると言える。だがそれをどう表現するかということになると誰でも同じだとは言えない。況んやこれを行うににおいておやである。

○道無限……人生の行路もまた涯(は)てしない。ここに人生の無限の悲しみと同時にまたその喜びも尽きるときがない。

○逆風のみが人間を偉くすると主張するのは間違っているだろう。広い世間にはそれほどまでに苦勞せずとも、人間として出来上がっている人が、必ずしも無いわけではないから……。

○だがわれわれ下品の人間としては、結局は逆境苦難によって、一つ一つ人間的に鍛えられてゆく外ないようである。これは或る意味では口惜しいとも思うが、どうも致し方がない。

○他人を非難するのは、多くはその人の立場に対する察しの足りない場合が多い。書物などの批評も、非難するのは、概してよく読んでいない場合が多い。

○自惚れ(ひが)ごころから良い仕事のできないことはいうまでもないが、さりとてまた徒らに自卑(ひが)していても、本当の仕事は出来るものでない。第一動力が出ない。

○自惚れと自卑の両面を超越(ちようだん)する一境……は、ほんとうの仕事は、そこからのみ生れるであろう。だがこの一境に立つことの如何に困難なことか。とくにこの一境を持続することの……。

○如何なる人間も、生きんが為めには、何処かに多少の弱点をもつを免れぬようである。だが一体誰がこれをとがめ得るだろう。もっともここに生きるとは食うという方が適切な表現かも知れないが……。

○本能というもののほど尊とくもまた、恐ろしいものはない……。そこにわれわれは神と悪魔との両面を見る。

○逆境は人間の心を緊きしめてくれる。ポカポカと太陽に照らされれば直ぐに脱(だ)ぐ外套(がいとう)も、寒風に吹かれては、離しようのないように……。

○ことば数が多いということは、その人の人間としての緊きしまりの足りなさを示すという外ない。たとえその人の才能が常人(じょうじん)に超えるところがあったとしても……。

○もし自分の現在おかれている境遇を至幸と考える人があつたら、その人は人生を最上に生きている人生の達人といつて

よい。

○前途に希望をもつことは良い。しかしその為めに現在の境遇に不満不足がつきまとうようであつてはならぬ。前途の希望は、今日一日を喜び、さらには感謝出来る心の展望し得る範囲のものでなくてはならぬ。「開頭」46号昭和26年2月発行)

あとがきに替えて

森信三先生弱冠40歳時の講義である。次号からも引き続き掲載させていただく講話は、とても40歳の男性に出来ようはずのない、と思わしめることばの宝珠であつてなのである。愚生の40歳時は文字通りハナ垂れ同然の未熟な人間であつた。今、大人としてもどこか感じ入るところあるやに思う。今からでも実行できるところは孫子に実践して行こう。

(30日二繁)

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話0744-4513422
Email:hj3@kcn.jp
http://web1.kcn.jp/syushn